

法蔵の華嚴教學と如来蔵思想

大井和也

中国・唐代の賢首大師法蔵（六四三―七二二）は、彼の初期の著作とされるいわゆる『五教章』^①において、『華嚴經』を中心とする師の智儼（六〇二―六六八）の思想を五教十宗の形によつて整理し、華嚴別教一乗を中心とする教学体系を打ち出した。

彼の教相判釈である五教十宗判の土台となったものは、『五教章』の中で「古今の諸賢」として挙げられた十家の教判である。また、使用されている用語等から見て、智儼の著作に見られる未整理の先駆的な五教判や、基（六三三―六八二）の八宗判などを踏まえているであろうことは、先学の指摘する通りである。

このうち五教とは小乗に始まり、大乘始教、終教、頓教、円教と次第する教判であり、その主眼は別教一乗の説である『華嚴經』こそがもつとも完成された教えであると、円教に位置づけることにある。この点に関しては『五教章』から『華嚴經探玄記』（以下『探玄記』）まで一貫した主張であるが、一

方で、大乘の始教と終教についてはその内容が大きく変化している。

『五教章』では始教と終教について次のようにいう。

三或開爲三。謂於漸中開出始終二教。即如上說『深密經』等三法輪中後二是也。依是義故。『法鼓經』中以空門爲始。以不空門爲終。故彼『經』云。「迦葉白佛言。諸摩訶衍經多說空義。佛告迦葉。一切空經是有餘說。唯有此經是無上說。非有餘說。復次迦葉如波斯匿王常十一月設大施會先飯餓鬼孤貧乞者。次施沙門及婆羅門。甘饈衆味隨其所欲。諸佛世尊亦復如是。隨諸衆生種種欲樂。而爲演說種種經法。若有衆生懈怠犯戒不動隨順。捨如來藏常住妙典。好樂修學種種空經。」乃至廣說。

解云。此則約空理有餘。名爲始教。約如來藏常住妙典。名爲終教。又『起信論』中。約頓教門顯絕言眞如。約漸教門說依言眞如。就依言中。約始終二教。說空不空二眞如也。（大正四五、四八一―中―下）

まず『解深密經』等の三法輪とは、法蔵が参考にした玄奘の三種教と呼ばれるものであり、その「後の二」というのは、

大乘の教えのうち密意をもって諸法の空などを説く照法輪と、包み隠すことなく三性と真如不空の理を説く持法輪の二つを指す。次いで、この内容を受けるものとして『法鼓經』を引用する。法蔵はそれを解釈して、空の理を主題とし明らかにしつくない部分を残す立場を始教、如来蔵の常住を主題とする勝れた經典の立場を終教とする。さらに『起信論』を援用して、いわゆる「依言真如」の説から如実空と如実不空の二種の義をそれぞれ始教と終教に対応させている。

以上のことから、『五教章』における始教と終教の差異は、諸法の空を説く立場か真如・如来蔵の常住を説く立場かという、空有の論理にあることが分かる。それはまた十宗判においても、始教に対応する第七の一切皆空宗、終教に対応する第八の真徳不空宗それぞれの内容を見ても明らかである。しかしながら、法蔵の著作の中でも後期のものと目される『探玄記』を見ると、始教と終教は次のように定義されている。

二始教者。以『深密經』中第二第三時教同許定性二乘俱不成佛故。今合之總爲一教。此既未盡大乘法理。是故立爲大乘始教。

三終教者。定性二乘無性闡提悉當成佛。方盡大乘至極之說。立爲終教。(大正三五、一一五下)

ここでも同じく『解深密經』の三法輪が挙げられているにもかかわらず、その適用および内実はまったく異なることが

分かる。すなわち、「第二、第三時の教え」とは先に見た照法輪・持法輪のそれぞれであるが、そのいずれもが始教とされている点である。それは、『解深密經』の立場が声聞や縁覚として根性の定まった衆生に眞の成仏を認めないという解釈に基づく。この一部不成仏の説が大乘としての法理を尽くしておらず、始教とみなされるのである。他方、声聞や縁覚として根性の定まった衆生のみならず、いかなる覚りの可能性もないと考えられた一闡提をも含む一切衆生の成仏を認める説が、より進んだ大乘の立場、即ち終教として定義づけられている。

したがって、『探玄記』において始教と終教を分かつものは、衆生の一部不成仏か一切皆成仏かという救済論的な問題である。一方で『探玄記』の十宗判は基本的に『五教章』を踏襲しており、七番目の一切皆空宗には大乘初教、八番目の真徳不空宗には終教が当たると法蔵も述べる⁽⁵⁾。だが、成仏不成仏に視座をすえる始教と終教の新しい理解を、空有の論理に基づく一切皆空宗および真徳不空宗にそのまま対応させてよいものか疑問が残る。このような不統一をもたらす成不成の論理への変化は、なぜ生じたのであろうか。

この問題を考察するに当たって手がかりとなるのは、四宗判と呼ばれる彼のもう一つの教判である。法蔵の著作の中でも如来蔵思想系の経論にほどこした註疏類に見られる独特の

教判で、教判の変遷という意味でも見過ごすことはできない。例えば『大乘起信論義記』（以下『義記』）における四宗判は以下の如くである。

第二隨教辨宗者。現今東流一切經論。通大小乘。宗途有四。

一隨相法執宗。即小乘諸部是也。

二真空無相宗。即般若等經。中觀等論所說是也。

三唯識法相宗。即解深密等經。瑜伽等論所說是也。

四如来藏緣起宗。即楞伽密嚴等經。起信實性等論所說是也。

此四之中。初則隨事執相說。二則會事顯理說。三則依理起事差別說。

四則理事融通無礙說。以此宗中許如来藏隨緣成阿頼耶識。此則理徹於事也。亦許依他緣起無性同如。此則事徹於理也。

又此四宗。初則小乘諸師所立。二則龍樹提婆所立。三は無著世親所立。四是馬鳴堅慧所立。然此四宗亦無前後時限差別。於諸經論亦有交參之處。宜可准知。今此論宗意當第四門也。（大正四四、二四三—下）

この四宗判において、『華嚴經』は除外されている。注目すべきは、二から四の次第である。二の真空無相宗は『般若』等の經、『中觀』等の論の説かれる空の思想の立場であり、これは『五教章』の始教に通ずると見てよい。しかし、『五教章』で不空を説く立場とされた終教は、ここでは三の唯識法相宗と四の如来藏緣起宗の二つに分析されている。

ここで唯識法相宗と称されているのは、玄奘（六〇〇—六六四）がもたらした新訳仏教、特に瑜伽行唯識派の思想である

ことはいうまでもない。この唯識法相の新思潮に対する法蔵の態度は、『五教章』の段階では未だ明確さを欠くことが指摘されている。⁽⁶⁾『五教章』の五教判に見られた大乘始教は、真如に如実空の義をみる『起信論』を背景とし、あくまで諸法皆空を説く空の立場として規定されていた。その始教に対応する十宗判中の一切皆空宗もまた『般若經』や『中論』等の教えを軸とするものと考えられている。したがって、始教に唯識派の思想を単純に当てはめることには困難が感じられる。その一方で、「諸教所詮の差別」を明らかにする章で展開された始教の教理は、多くの場合、玄奘の手になる唯識派のものを中心とした経論によって支えられている。『五教章』の始教と終教が、それぞれ空、あるいは不空の立場を基準とする限り、新訳の唯識思想に適切な教判上の位置は与えられていなかったというべきである。

しかし、この『五教章』における曖昧な態度は、四宗判によつてようやく一つの解決を見たのである。法蔵は如来蔵思想を深く考察することを通して、玄奘や基の展開した新訳の唯識思想を批判的に乗り越える足掛かりを得、真如・如来蔵の不空を説く教説にも違いがあるという理解に至つたものと考えられる。

この違いをさらにはつきりとさせるかのように、『義記』では四宗判に続いて『大乘起信論』の教えを被るべき衆生の機

根について、次のように述べている。

第四教所被機。説有二重。一約權教。即五種姓中。菩薩種姓及不定性。是此所爲。餘三非此。以無分故。如瑜伽等説。二約實教。一切衆生皆此所爲。以無不皆當得菩提故。(同、二四三下)

第一に唯識法相的な五性各別の立場を示し、そこでは菩薩種性と未だ機根の定まらぬ不定性の衆生のみが教えの対象であるという。第二は一切皆成仏の立場であり、すべての衆生が教えの対象であるという。同じく真如・如来蔵を説く教えといえども、成仏不成仏という観点からみれば、その内実に権実という大きな違いが生じるというのである。したがって、先の四宗判に見られた唯識法相宗と如来蔵縁起宗の差異は、成仏の可能性という問題意識によつて、さらに明確になるのである。

この問題意識は、ひいては彼の華嚴教学そのものにも影響を与えた。すなわち、さきに『探玄記』において確認された、五教判の中の始教と終教を隔てる論理の変化である。成不成の論理は、如来蔵思想の考察を経て明確になった仏教的課題の一つに過ぎないであろうが、法蔵にとつて決定的な意味をもつようになつたのである。

例えば『探玄記』においても、教判論を述べた後に衆生の機根を主題とした一節が続く。そこでは『華嚴經』の教えの対象たるべき衆生の機根について、最も劣るものと見なされ

た「諸凡愚外道闡提」たちも「悉有仏性」とし、やはり『華嚴經』の教えが及ぶことを認めている。

さらに、その教証として『仏性論』や『宝性論』といった如来蔵思想系の論書を挙げている点を見ると、法蔵の華嚴教学の形成過程において如来蔵思想の果たした役割は決して小さくなかったことがうかがわれる。彼の如来蔵思想の理解がどのようなものであつたのか、改めて検討すべき重要な課題であると思われる。

- 1 よく知られている通称に拠つた。このテキストの標題や成立等の問題については、鎌田茂雄『華嚴五教章』(大蔵出版、一九七九年)一九—二三頁および吉津宜英『華嚴一乘思想の研究』(大東出版社、一九九一年)一七八—二〇八頁を参照。2 吉津宜英『法蔵の四宗判の形成と展開』(『宗教研究』二四〇、一九七六年六月)八九—九二頁参照。3 大正四五、四八一上。4 大正四五、四八一—四八二上。5 大正三五、一一六中。6 吉津(上掲論文)九五—一〇三頁および木村宣彰『法蔵における『大乘起信論義記』撰述の意趣』(井上克人編著『大乘起信論』の研究)関西大学出版部、二〇〇〇年)八七—八八頁を参照。7 大正三五、一一六下—一二七下。

〈キーワード〉 法蔵、華嚴宗、教相判釈、如来蔵思想

(花園大学非常勤講師)

between the physical (the non-sentient) and the sentient. It is also explored in this paper how Chengguan's view on *dharmatā* and *buddhatā* may have been influenced by the thoughts of nirvāṇa sect representatives such as Huiyuan, Jizang, and Fabao.

112. Fazang's Huayan Doctrine and Tathāgatagarbha thought

Kazuya Ōi

In the Tang dynasty, Fazang (法藏 643-712) developed his teaching on Huayan based on the teachings centered on the *Avataṃsakasūtra* (華嚴經) he received from his master Zhiyan (智儼 602-668). His system of thought is organized by a classification of doctrines called the Five Doctrines and Ten Schools (五教十宗判), which was first mentioned in the *Huayan yicheng jiaofen ji* (華嚴一乘教分記 aka 五教章).

In the Five Doctrines, the distinction of the standpoints between beings and emptiness is used to characterize Mahāyāna Buddhism into early (始教) and final teachings (終教). However, in his later work *Huayan jing tanxuan ji* (華嚴經探玄記), early and final stages are distinguished by whether all beings possess the Buddha nature (and will achieve Buddhahood) or not. This shows that the criteria for distinguishing between the early and final teachings changed.

There are also some commentaries by Fazang on the texts of Tathāgatagarbha thought. These commentaries contain another classification of doctrine (the Four Schools 四宗判) and also display an interest in the attainment of Buddhahood by all beings. This suggests a possible cause of the changes found in the *Huayan jing tanxuan ji* and provides evidence of the influence of Tathāgatagarbha thought in Fazang's Huayan Doctrine.

113. The Idea of Perfect Integration in the *Dacheng yizhang*

Amiko KITAZUKA

I compared the idea of Perfect Integration (円融) in Huiyuan's *Dacheng yi-*